

## 令和6年度 研究概要

<b>所属名</b> 特別支援教育センター	<b>研究会議名</b> 個別最適な学び（特別支援）研究会議
<b>研究主題</b>	特別支援学級における児童生徒の自己調整力の育成 —AAR サイクルを通して—
<b>資質・能力</b> 育成を目指す	児童生徒が自己調整する力
<b>研究内容</b>	<p>令和3年1月の中央教育審議会答申「令和の日本型学校教育」では個別最適な学びと協働的な学びの実現を目標としている。川崎市の「かわさき教育プラン」ではすべての子どもが個性を發揮できる教育を推進しているが、特別支援学級の児童生徒数の増加や障害の多様化に対応することは喫緊の課題である。「個別最適な学び」が目的化しないようにするには児童生徒の「自己調整」する力を高めることを目的にする必要があり、答申においても重要性が強調されている。特別支援学級の教師に対するアンケート調査では、授業における児童生徒の自己調整力に課題を感じている教師が多いことが分かった。</p> <p>本研究では児童生徒の「自己調整力」を文部科学省『学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料』に示されている学習過程で捉え、「A 学習の目標や教材について理解する」「A 見通しをもって学習する」「R 過程や達成状況を評価して次につなげる」というAARサイクルにあてはめて考えていくことにした。また、教師が自立活動における指導を参考に配慮や手立てを行うことで児童生徒の自己調整が促されると考えた。検証の視点として児童生徒が教科の目標を達成したかどうかや児童生徒の発言の変容、教師の変容等を設定した。</p>